

2023/3/21 フォーラムでの参加者からのご質問（質問票等のご記載）に対する先生方からのご回答です。

（ご質問の文面はユーラシア研究センターで記載文字を確認のうえ、一部個人名を秘匿した以外は原文のまま入力、掲載しております）

（ご質問）

「書は人を感動させる何かを持っている」良い言葉だと思います。しかし、今IT化により、書くことがなくなっています。表音文字の世界では単なるデザインですが、表意文字の私たちはぜひとも個性を残したいです。でもこのまますたれていくのか？と不安があります。「書く」という行為の将来を皆さんどうお考えですか？

<回答>

墨は「ことば」を文字に変え、記録、伝えるといった書く道具として発明されました。時代時代に生きる人々の大切なコミュニケーションのための文字が、より簡便に書きやすいものになってゆくのは、文字の歴史を見れば一目瞭然のことです。

漢字は文字そのものに意味を持たせる、言霊として心を表すものですが、近年中国が簡易文字に変化したように、時代が変わると文字そのものの意味が横におかれ、同時に書く所作も変わってゆくことは良かれ悪しかれ食い止めることは大変難しいことです。

IT時代の到来は、書くことが自動化され、これはもう変わりようがないと思われまます。

もっと上手に書きたいという願望から書道という芸術が生まれ、諸芸術として発展してきました。

今や文字はコミュニケーション、記録の手段としての役割と、書芸術表現の役割に二分化されてきています。

小・中学校の書写教育が次第に衰えてゆく傾向は、正しく毛筆文字を教える教員がどんどん少なくなってきた、「書く」ことへの子ども達の興味が薄れてきています。多分これからは「書く」ことから「打つ」ことへと変わってゆくことは、まちがいありません。文字のもつ意味が忘れられて、記録する、伝える道具としての意味合いがますます強くなっていき、中国で起きたような簡易漢字、記号に代わってゆく可能性がないとは言い切れないと考えています。

墨・筆は、書道芸術を志す人々の道具として生き残ることが唯一の将来展望と思います。

（綿谷）

明治時代、義務教育において習字は、芸術よりも実用としての「正確に、速く」書くため必須とされ現代に至っています。今後、多岐にわたる情報を速く正確に伝えるためだけを考えれば、手書きは無くなっていくかもしれません。

（桃蹊）

(ご質問)

日本には水がどこにでもあったので、持ち運べるように固形にしたと思います。(以下略)

<回答>

墨はもともと消し炭の粉末を漆液に混ぜ込んだ液状でした。それが固形になったのは中国前漢の時代(2000年前)のことです。消し炭粉や石墨粉を漆液に混ぜ込み大豆大の大きさに丸め乾燥させました。これが「墨丸」と呼ばれ、初めての固形の墨です。

文字の普及は誰もが必要な時にすぐに使いたいといった願望がでてきて、携帯できるように小粒にされました。この墨丸と筆を携帯し、水さえあればいつでもどこでも書くことができる、画期的な発明でした。

我が国へは、日本書紀巻二十二推古天皇十八年(610)に高麗の僧曇徴が墨づくりをもたらした墨の製法は中国漢で作られていた製法と同じことであったと思われます。”

(綿谷)

(ご質問)

貴重なお話をありがとうございました。(株)呉竹、筆工房「文殊房」を工場見学などできるのでしょうか？

<回答>

墨づくりの見学は、申し込みばできます(TEL: 0742-50-2050)。

ただし、個人での見学は、よほどのことでないかぎり、お断りしています。

見学希望される方は、4名以上のグループでお願いしています。

墨の製造は、11月から翌4月までの寒い6か月間に行います。ですから見学はこの期間にお申込下さい。朝9時30分から午後3時までの間に見学いただけます。

(綿谷)

事前連絡(ご予約)をいただければ、工場(工房)見学は可能です。

文殊房

奈良県桜井市三輪 1186-1 (大神神社大鳥居入る 100m)

TEL: 0744-45-2004

(萬谷)

（ご質問）

柳井先生の講演、書道とは何か、書くこと、先人たちの書についての言葉等、多くを学ばせていただきました。講演の中で、様々な書論や言葉を引用がございましたが、もう少し詳しく読んでみたいと思いましたが、メモがかきとれませんので、参考文献を教えてくださいました。所用で、ZOOM参加を途中退席することが残念でして、申し訳ありません。貴重なお話を有難うございました。

<回答>

書についての論説は、書の現代的意義や芸術的価値を見出すことができ、さらには将来的な書の在り方についても深く洞察することが可能になります。

私が最も重要かつ正論と考えるのが

- ・高村光太郎『美について』中の「書について」

また、講演でご紹介させていただいたものは

- ・中国の孫過庭『書譜』
- ・本の古くは、尊円親王『入木抄』
- ・西田幾多郎『続 思索と体験』にある、生命のリズムとして書を「凝結せる音楽……」
- ・田邊萬平『書について』書の日常性について、多くの書家が造形芸術として書を語る中、造形性を肯定しつつも日常のふるまいの鍛錬道であるとしている論。
- ・比田井天来、上田桑鳩、井上有一らの書芸術論

他にも書家に限らず多くの作家が書を愛し、言葉を残しています。

(桃蹊)

（ご質問）

日本の書道が黒一色であったというお話は大変面白かったです。エジプトではパピルスに用いられたインクは、黒の他に赤や青もあった様ですので、なぜ日本が黒一色だったのか興味が湧きました。

<ご回答>

甲骨文字に消し炭の粉と漆を混ぜ合わせて刻んだ文字に刷り込むことから始まった墨は「黒」が当たり前でありました。漢の時代に入り墨の需要が飛躍的に増えると、消し炭の粉では間に合わず、松の木を燃やして大量に煤（すす）をとることが始められ、墨の色は「黒」が定着しました。

古代エジプト等に見られる岩絵の具の着色は、宝石ともいわれるような岩料が土の中に眠り、これを掘り起こして粉末にして顔料が作られましたが、多くの人たちが文字を書くのには到底足りません。

文字を書く道具としての墨は無限と言われるほどの量が必要です。結局、墨の色は歴史が示す如く、「黒」が最適でありました。

(綿谷)